

おかしい、
よくある戦争ゲーム風の世界なのに、
敵の兵士が女だけでキ〇タマばかり狙ってくる！
『天下取るまで帰れません』



玉子王子 著

一章 異世界転移！ 目標は世界制覇！ ……って言われてもなかなか信じられるものじゃない

荒野。

その真ん中に、一人立っている男。

三〇ぐらいの、あまりモテそうにないオタク風の男。しかし、別にオタクではない。

ゲームはやるが、コンシューマーぐらい、スマホゲームは流行りだしたころもう大人だったので手を出さないでいる。

漫画も流行ったモノを読む程度。

彼女がいたこともない、高校を出て地元の中小企業に入るも、倒産でフリーター化し、なんとなく三〇まで来てしまった。

真剣に考えると未来ちょっと不安になるかもな、といえなくもない立ち位置。

水本海治。

「なんだここは？」

水本は首をひねりつつ、周りを見る。

と、テント。

毛皮を縫い合わせたテントが一〇〇個ほども、水本の背中側に建っていた。

「きゃ、キャンプ場？」

「なわけないでしょうが」



ビク、と飛び上がる水本。

それに、笑いかける少女。

ピンク系統の色の髪、一〇歳か、もうちょっと下か。小柄なので幼く見える。

——なんだこの子は？ 知り合いみたいに話しかけてきたが、でも、子供だからか？ 子供が話しかけたくなる感じの人間じゃないが。かといって怖がられるヤンキー風でもないし……

考える。

と、音。

シー、というような変な威嚇音。水本には威嚇音だとわかった。テレビで見たことがあった。

蛇だ。

かなりの毒を持ったもの。

普段なら聞き逃すが、雑音がない状況である。

さらに、着た覚えのない場所にいた変な状況で五感が研ぎ澄まされていた。

「蛇……」

眩く。周りを見る。いた、少女の横。

というより、少女を威嚇している。

「危ないっ！」

思わず少女を抱き上げ、蛇から引き離す。

あまり揺れないように、慎重に、しかし素早く蛇から離れる。

そして下ろすところで、子供に抱き着いたことにならないかと不安になる。

——やべえよ、イケメンならまだしも、こんなブサメンじゃ……ブサメンってこともないが、まあおまけして「愛嬌あるかも」程度だ。やべえ、捕まるんじゃないか？ 事案発生？ でも、だからって……そうなるとしても、放っておけない。

子供が毒蛇に噛まれるのを放置するなど、水本には考えられないことだった。

そんな善良な人間が、説明も聞いてもらえず犯罪者扱いされるのを恐れねばならない社会とは何だろうか。

——モテない男には人権がない……同じことをしても、イケメンなら感謝されるだろうに……この子もどういう反応するか。

下ろす。と、手を広げる少女。

「ありがとう」

言って、首に手をまわし、飛びつく。

唇に柔らかい感触。目を剥く水本。

初めての感触。

「な」

「あは、水本さん純情一。私だって初めてだけど、何ともないよ？」

「は、初めて……俺も初めてで……いや、嘘。本当はちゃんとセックスの経験も……」

「あるわけないじゃん」

「経験はありまあーす！」

顔を真っ赤にし、心臓を高鳴らせつつ叫ぶ。

嘔き出す少女。

「ぎやははは！ まあそういうことにおこうかな。その年で「おっすオラ童貞」って名乗るのもきついでしょ」



「き、君、なんでわか……」

「あ、やっぱ童貞なんだ？」

ぎゅ、と股間が縮む。見抜かれた。

下手をすれば年齢一桁の少女に。

——カマかけられた、引っ掛けられた。こんな子供に……っていうかこんな子供とキスした、逮捕だ、逮捕。タイホ確定。うさぎ県の婦警さんたちはそういう「**性犯罪**」にはクツソえぐいぞ、キ〇タマ潰されまくる。ヤベえよ……

水本が住むうさぎ県は警察が婦警だけで、ことのほか性犯罪に厳しい。というか、理由をつけて金的を蹴ってくるので有名なドS女性の集まりだった。

ナノテクノロジーが発達し、玉が潰れたぐらいなら一瞬で治せるため、玉がなくてどのぐらい痛いかわからない女たちは遠慮なく潰しに来る。

——タイホタイホ……いや、誰にも見られてないからセーフか？ というかこんなかわいい子とキスできたなら逮捕されても本望かな……別にロリコンじゃないというか、ロリ専門じゃないが、ロリでも行ける派だからな。

わけのわからないことを考える水本。

と、笑っていた少女が急に真顔になる。

別に水本の考えに反応したわけではない。

「それじゃ水本さん、改めて」

「いや、童貞じゃないよ？ 経験のほうはありまーす！ ってことはわかってもらいたいね」

悪あがきの水本。

全く聞いていない少女が頭を下げる。

「これから、よろしくをお願いしますね」

「な、なにを？ 頼んでるの？」

——っていうか女の子と話すの、何年ぶりかな？ いや、コンビニの店員さんとかとは話してる…
…まあ、店出るか出ないかのところで時々小声で「いつも同じもん買ってる」とか言われるのが聞こえたりするから、むしろ会話すんのストレスだけど。ったく、どいつもこいつも馬鹿にしゃがって…
…小学校のころから、女子には嫌な目で見られてきたんだ。そんな俺がついにキスを……でもこんな小さい、でもすごい可愛い子だし。っていうか俺両刀だし、大人でもいいけど、ロリでもいいというね。

それは両刀でもなんでもないだろう。

「さっき頼んだでしょ？」

「え？ いつ？」

「さっきですよ……」

言いつつ、ぼそりと小声でつぶやく少女。

「まあ夢の中での話だから、覚えてないかな？ 夢の中だと判断力落ちるから「お願い」聞いてもらいやすいけど、「約束したでしょ」と詰められないのが難点かな」

「え？ 何々？」

「うふふ、忘れちゃったのかな。それじゃもう一度説明しますね……とりあえず私の名前。私はフォンテーヌです」

ぺったんこの胸を撫でつついう。腹のほうが出ている。唾をのむ水本。

——いやいや、やっぱりロリはこの感じがいいわ。前から見るとお腹のほうが出てる感じがいい、後ろから見るときは髪の毛縛ってうなじが見えてるのが望ましいね……いや、そんなこと考えてる場合じゃないな。今一番聞くべきなのは……ここがどこかってことだ。

「フォンテーヌちゃん、ここ、どこか知ってる？」

「ここはまだ名前もない土地ですよ。そこにいる開拓者が街を作れば、あなたが付けた名前の土地になりますよ」

「へえ……」

——何わけのわからないこと言ってんだこの子は？

「ここはシミュレーションの世界なんです。というか、この世界丸ごと一つの超巨大コンピューターが作り出した世界……のようなもので……微妙に違いますが、まあ大まかそんな感じですかね。水本さんの世界とはまた別のところなんです。バーチャルなアレで」

「なるほどね」

——マジで何言ってんだこの子？

怖くなってくる水本。青ざめる三〇男の前で、一桁少女が笑う。

「ゲームみたいなもん、と思ってください」

「え？ ゲーム？」

「シミュレーションで、やったことあるゲームは？」

ゲームオタクではないが、ある程度やってきている水本。

顎をこする。

「ファイアーエ〇ブレムかな。あとスパロボとか」

「エ〇ブレムやってるなら有利かもしれませんね。ああいう感じで、天下を取ってほしいんです」

——クソオタっぽいのに、和製シミュレーションか。ハーツオブ〇イアンとかやってそんな感じなのね。エ〇ブレム、エ〇ブレムね……味方の兵隊一人一人に顔がある奴ね。スパロボも大体そんな感じだよ。違うなあ、この世界とはだいぶ違う。面クリア型のコンシューマーシミュレーションとこの世界は大分違う……ユニット顔無しで、コスト払って買って行って、技術開発もやっていく感じだから、方向性違うなあ。大〇略とかのほうが似てるなあ……あれもまた違うけど。でも、まあおいおい慣れていけばいいよね。っていうか、すでに呼んじゃったんだからやらせるしかないしね。

有利だ、などといいつつもその中身は適当である。しかし、それでも「有利なのか、やった」などという反応は見せない水本。

困惑気味に首をかしげるだけだ。

「何が何やらわかんねーんだよなあ……っていうかゲームやってたらなんだっての？」

「ですからね、この世界でゲームみたいな戦争をしてもらいたいです。戦争と政治を」

説明されればされるほどわからなくなってくる水本。

——夢にしちゃめんどくせーな。普通わけのわからない論理でも、夢の中なら「通ってる気がする」もんだろうに、全くわからんぞ。

しかし、話を進めていく少女。

「この世界を制覇したら、水本さんは元の世界に帰れるんです。よかったですね！」

親指を立て、ガッツポーズの少女。

かわいいので思わず微笑んでしまう水本であるが、内容に突っ込み入れる。

「よかった……いや、待ってくれよ。それって無理やりプラスの表現してるだけで、「制覇しないと帰れない」って意味じゃないか？ 大体、元の世界って……」

「はい、さっきも言ったけど、ここは異世界ですよ。正確に言えば、超次元にあるコンピューター上の世界のような……現実の世界に見えても、実際には作り物だという……架空の世界ですかね？ 結構リアルですが、人の内面はあるようなないような微妙なものです。まあ、実際の人間だって本当に内面があるのかは本人にはかわからないから同じですよ？」

「いやいや、待ってよ。ここが異世界？ ってことは、なんだ夢か。やっぱり夢なんだ」

「夢じゃありません。そして、契約したからには、世界を制覇するまで帰れません。大丈夫、ここで何千年経過しても、年も取らないし帰ったら来た日に戻るだけですから」

「へえ」

納得したような返事をするが、内心は全く違う。

——夢か。なーんだ。明晰夢ってやつか。ほんじゃ、その辺に女の子でも出してセックスと行こう。あーあ、普通にセックスできる日って来るのかねえ？ この年で童貞だ……まさか一生童貞じゃないだろうな？ 考えてもへこむだけだ、やめよう。

「女出てこい！」

拳を突き上げる。

のけぞり、頬を引きつらせるフォンティーン。

「うわ、ヤベえよこいつ……夢だから、楽しんじゃおうってこと？」

「当たり前だよ」

「まあ……それはともかく、そろそろ開拓者に指示を」

少女が言うと、近くのテントから人が出てくる。一人、背の高い若い女性だった。

水本の前までやってきて、頭を下げる。

「水本さま、ご指示を」

「おお、なかなかかわいいね」

「はい？」

「やらせろ！」

夢だとしても雑過ぎる行動。

「きゃあっ！」

掴みかかられ、悲鳴を上げる女。

頬を緩め、抱き着く水本。胸に顔を埋める。柔らかい。体温、甘そうな臭い。それでも、先ほどのフォンティーヌの唇に比べれば今一つという気もしたが、とりあえず大人で我慢する。

「おほおおお、夢とは思えない……」

「やめてください！」

下がろうとする女。しかし足を開き、その場に踏みとどまる水本。涎を垂らし、巨乳に顔をこすりつける。

「やめない！ やらせろ！ どうせ夢……」

「いい加減にしろ！」

「はぐっ！」



水本の開いた足の中に、女のすらりとした足が跳ね上がる。

膝がゴリッと音を立てるように股間にめり込み、体が持ち上げられる。

すらりと背が高い女、足も当然長い。

開拓民だのという割に質素な布の服を着ているが、その布の間からぬっと肉付きのいい太ももが突き出され、その先の膝が水本の肉玉を見事に捉えていた。左玉が直撃を受け、潰れなかったのは運よくツルっと滑って袋の中に逃げたから、わずかに芯をそれていたからに過ぎない。完全に「潰れてもいい」ぐらいの蹴りを放っている。というか、とっさで何も考えていなかったのだろう。

左玉に潰れかけるほどの打撃を受け、右玉も勢いよく押しのけられる。

一瞬で全身の汗が噴き出すダメージを受ける水本。

「ふほ、ほんぐううう」

腰を引き、股間を抑える。

「ぬおおお」

唇を噛み、どうにもならない痛みにも必死で耐える。

それに、怒り心頭の背の高い女。

「いくら水本さまでも、今のはひどすぎます！ ……あら？ あは？ あれ？ もしかして、今のお腹狙ったんですけど……やだっ、金の？ 金の？ アレに？ 直撃？ マジっすか！」

怒りに顔を引きつけていた女だが、股間を抑えて悶える水本を見下ろすや、頬を緩める。

女は金的に悶える男を見たら笑う、というのはこの異世界でも同じようだった。

顔を赤らめ、口を抑えつつ笑う。

「うっそ、タマタマに？ マジで？ マジで？ その、大事なところに？ ゴールデンボールに？ 男の急所……**ゴール・D・ボールに？**」

「ぎゃはははは！ あんなおもっくそ股間蹴り上げて「やだ、タマタマ狙ったわけじゃないのに」ってそりゃ無茶だよ！」

「だってフォンテーヌさま！ あははは、っていうか、笑っちゃ悪いですよ。痛いんでしょ、そこ？」

「私はよくわからないわー、だって女の子様だもんね」

「私も正直「そこまで痛くねーだろ」とは思ってますけど……あはは、でもよくわからないから口に出せないというか」

「くぬうううう」

——わ、笑うことじゃねえだろ？ 急所だぞ急所。……いや、夢の中だからそもそもなんで痛いんだ？ いや、夢の中だろうが……キ〇タマを蹴るな！ **金蹴りは人道に対する罪だ！**

震えながら、何とか上体を上げて、背の高い女を見上げる。

見上げつつ、口を開く。

「お、お前に一言ものも一す」

「ぎゃはははは！ なんで江頭さんなの！？」

「誰なんですかそれ！」

「ち、違う……そういうことじゃなくて、とにかく聞け。キ〇タマは蹴るな。当たり前の事だろ？」

「それより、そろそろ指示もらえますか？」

「もうこの辺に街作っちゃおうか？」

「いいんですか？ 水本さまは？ 指導者ですよ？」

「いいでしょ水本さん」

——どうせ一周目なんて練習だもんね。まあシミュレーション上の世界とはいえ、中で生きてる人の前でそれは口に出せないけど。生きてる……って言えるほど内面あるのか微妙とはいえ。

考える少女の前で、考えない男がうなづく。

「わけわからんけど……いいんじゃないか？ っていうか玉が痛すぎて考えられない……」

「それじゃ、ここに街を。名前は？」

「名前？ じゃあ、うさぎ県」

出身県を適当に口にする水本。

噴き出すフォンテーヌ。

「ちょ……「県」って！ 「町の名前」って言ってただけど？ っていうか発展していったら、水本さんの国の名前になると思うけど、いいの？ **うさぎ県国**で？ 後で変えられるにしても酷くね？」

「じゃあ「うさぎ」で……って、県つけないとマジでただのうさぎが好きな奴がつけたみたいじゃないか？」

「ま、名前なんていつでも変えられるんだから、とりあえず「うさぎ」でいいねもう」

「それでは、ここに新都市「うさぎ」を建設します。はじめの都市は首都となるので、よろしくお願ひしますね」

そういつてテントのほうに歩いていく女。

ぱっ、と水本の視界がフラッシュを焚かれたように光に遮られる。

「あっ」

目をつぶり、開く。

と、不思議なことに周囲に四角い泥を固めた家々が立ち並んでいた。

舗装などはないが家の並びから道があることはわかる。

「あれ？ いや、夢だからか……街が一瞬でできたんだな」

「あの日から五〇〇年後だよ」

「五百年って！ 夢にしてもスパン長いな」

「人口もそこそこ増えてきた……で、どうする？」

「どうって？」

「周りに外国が五つぐらいあってね、それを全部支配するか滅ぼしたら勝ちなんだ」

「そうか、めんどくさい夢だな……で、兵隊は？」

「自分で作るんだよ」

「ん……そうか、スパロボというか、「ギ〇ンの野望」みたいにユニット買う感じか！」

「お、割といい例えじゃん。まあギ〇ンやってない人にわかりやすく言えば、ゲームの中で資源を集めて将棋の駒をそれで買ってむっちゃ広い盤面に置いて戦う感じかな」

「誰に言ってんだよ……俺はギ〇ンやってるって言ってるだろ？」

「独り言独り言」

口笛を吹くフォンテーヌ。露骨なごまかしに目を剥き顎を引く変な顔になる水本だが、夢だと思っている以上多少の不自然さは適当にスルーする。

「納得いかないがまあいい……それじゃ、どういうユニットがあるのかな？」

「市民と開拓民だね。食べ物と引き換えに生産されます」

「兵隊じゃなくないか！？　　というかこの村は「市」って言うていいの？」

「兵隊を作るには、とりあえず兵士訓練所を作ること」

「あー、めんどくさい夢だな……ギオンなら工場建てたりしないぞ？」

「あれは開戦の時点から始まるからでしょうが」

「めんどくせー」

ため息をつく。と、気配に気づいて横を見る。

いつの間にか、水本の横に背の高い女が立っていた。見覚えがある。

「あ、この前の」

「いや、五〇〇年後だから。子孫の人じゃない？」

「そうそう、水本さまの急所を蹴り上げたのはご先祖様です」

「そんなこと語り継いでるんだ……まあ何でもいい、歩兵訓練所を建てて……って言うか兵舎とかじゃないのか？　　まあ名前なんて何でもいいけど」

「もう少し待ってもらえれば木の備蓄が溜まりますから」

「ん？　　そういえば金は？」

「石器時代だからまだないよ。電力や石油もないし」

「今石器時代なのか？　　村の感じからするともうちょっと行ってそうだけど……って言うか石器時代でも金ぐらいありそうだけどな……それじゃ備蓄が溜まったら歩兵訓練所を建てて」

——ほんとにめんどくさい夢だな……

長身の女が去っていく。

フォンティーヌが水本を見上げる。

「それじゃ、どうする？　　時間飛ばす？　　飛ばそうと思って目を瞑れば、平時なら飛ばせるよ」

「ちょっとその辺見ていくわ、どうなってるのか気になる」

町に見えないこともないが、町というほどの人口もいない。

人の姿もまばらだ。

町の外を見ると、森の周りなどに人がいる。

フォンティーヌと二人で近づく。

男女が二〇〇人ほどで木を切っていた。

石器というか、石斧で。

「マジで石器時代なんだ、大変だな……」

遠くから見ている。と、揉め事が始まる。

男女で分かれて何か言いあっている。

と、女のリーダーらしいものが何か怒鳴り、前にいた男のリーダーらしい者を蹴とばす。

当然のように、股間を。

全く、当たり前のように太ももの間に足を振り上げる。

とっさにつま先立ちになる男、少しでも足から離れたいようだ。

だが全くの無駄な努力。

屈強な男だが、屈強だろうが世界最強だろうが股間を蹴られたらどうしようもない。男の強さは女が股間を蹴らない間だけの話なのだった。

股間を蹴りつぶされ、時間が止まったように動かなくなる男。

女が足を下げると、腰を引いて股間を抑える。

鈍いうめき声。身動きできない。

女は蹴り慣れているようで、さほど強く蹴らず、しかし行動不能になる程度の力は込めている。肩をすくめる。

「このぐらいで動けないんだ？ 受けるわ」

腰を引いて悶える男を指さして笑う女。

周りの女たちも嘲笑する。

同じように腰を引いて見せる者もいる。

「うわ、なんだ？」

頬を引きつらせる水本。

女たちの振る舞いに、怯む男たち。一触即発という感じだったが、明らかに男らの腰が引ける。それに、女たちが嘲笑しながら前に出る。

出られると、下がる男たち。

待ってくれ、とリーダーが言う。

股間を抑え、動けない。囲まれるリーダー。

笑いながら小突く女たち。

一人が羽交い絞めにする。

リーダーが、軽くパンパンと股間を叩き、声を上げる男を笑いつつ、しゃがむ。

しゃがんでズボンを下す。

「やだ、小さいよこいつ！」

「っていうか、こいつが短小なのは知ってるんだけどさ」

「まあ狭い共同体だから、男のサイズ位ね……」

「実のところ、共有されてんだけど」

「聞いた、あんたたち？ 粗チンくんはちゃーんと、知られてるのよ？」

顔を赤らめ、目をそらす男たち。小さいものも、そうでないものも、男というだけで見下されている気がして羞恥でいたたまれない。

また、笑う女たち。

喧嘩しよう、というような気力を完全に奪われ、俯くしかない男たち。

一人、リーダーが小ぶりな一物の皮を引っ張られ、嘲笑される。

「こんなチ○ポでよくリーダーやってられるねえ」

「男全員が配偶者得られる狭い共同体でよかったね？ 絶対あぶれるよ、自由競争したら」

「この短小チ○ポの奥さんになる運が悪いのは誰かなあ？」

「そりゃジャンケンで一番負けた奴でしょ」

「ぎゃははは！ 今から練習して強くなっておかないと！」

「こんなチ○ポで女に逆らってんじゃねーってことだよねえ」

「っていうか、キ○タマぶら下げて女の子様に逆らうなんて一〇〇年早いよ。蹴っちゃうぞ？ 金ちゃん蹴っちゃうぞ？」

「玉抜いたら？ まあすぐ治っちゃうけど」

「玉が潰れようが腕が取れようが、時間で回復するからね」

キャラたちはHPを持っていて、怪我の深さや場所によってそれが減少し、時間が経てば一定ずつHPが再生して傷も治っていく……そういうアバウトな世界なのだった。

「私ら市民は大体HP一〇〇だけど、玉潰れたら九〇マイナスなのよね」

「こんなもん簡単に潰れるのに！」

「はぐっ！」

ぎゅ、と玉を握られて爪先立ちのリーダーだが、羽交い絞めで逃げられない。

その情けない姿を見て手を叩く女たち。

「男よわ！」

なんとなく近づき、話を聞いて青ざめる水本だが、つい漫然と歩いて女たちの近くに寄っていた。

当然、女たちは気づく。

「あら、水本さまじゃないの」

「いらっしやってたんですね」

歩み寄ってくる女たち。男らには、作業を続けるように叫ぶ。

今にも争いそうだった男たちだが、リーダーが金蹴り一発であっさりやられてすっかり怖気づいていた。

——うわ、ひでえな、**金的支配**ってわけか。っていうかこいつらHPとかなんとか……変な設定の夢だな。

「やるねお姉さんたち」

「あは、それは初代リーダーがねえ……水本さまの金ちゃんを……」

「そうそう。蹴り上げた武勇伝が語り継がれてますから、このうさぎでは女が圧倒的に強いんですよ」

「うさぎでは……か。もっと街らしい名前にすればよかったな」

「変えてもいいよ？」

「じゃあ、うさぎ市にするか。古代都市って「ウル市」とか呼ばれてるような、呼ばれてないような、そんな感じだし」

「それじゃ、今日からうさぎ市！」

フォンティーヌの声を聞きつつ、ちらっと男たちのほうを見る。

コンコンと、木に石斧を叩きつけ始める。

——女どもにキ○タマ蹴られつつ、苦労してるのか。俺が不用意に玉を蹴られたから？ 悪いことしたな……まあ、夢だ夢、気にしても仕方ない。というか……

「そ、その……さっき君たち、何か言ってたよね？」

「何か？ ああ、サイズみんなが把握してるって？ あは、そりゃそうですよ。こんな狭い町ですよ？ 子供も年寄りもいませんけど、それでも人口千人ですからね、男女半々で……交流してれば、

目立つ奴はわかります。あは、さっきのあいつ、うさぎ市一番の短小なんですよ。それが偉そうに木材収集組のリーダーって……笑っちゃいますよね」

リーダーはもう男らの集団に入っているが、金的をやられたダメージか、短小責めのダメージかわからないがぐったりして切り株に座り込んでいた。

同じ男として、ダメージがわかる仲間たちは文句は言わない。

一方、女たちはそれを遠くから見てせせら笑う。

「あいつ何休んでるのかなあ」

「キ○タマ痛いんじゃない？」

「大して強く蹴ってないって」

「大げさなんだよ、男ってさ」

「粗チン補うために働けての」

「やっぱりチンチ○小さい奴はダメね、雄として」

唾を飲む水本。

——なんだこいつら、おかしいぞ。だって俺のチ○ポもかなり……というか**がっかりするぐらい小さい**んだ。なのに俺の夢の世界の女たちがなんで短小チ○ポをこんなに嘲笑う？ むしろ「大事なのはテクニック」とかいうのが筋ってもんだろうが。

「そういえば……」

リーダーが水本の肩を叩く。

「ん？」

「水本さまは、どのぐらいなんですか？ サイズ」

「え、それは……」

「私たちの指導者なんだもん、さぞかしご立派なんでしょうね」

「見たいなあ」

いつの間にか、周りを囲まれている水本。

好意的な若い女に囲まれたことなどない童貞である、焦り、周りをきょろきょろ見つつ、引きつった笑いを浮かべる。

「ちょ、ちょっと待って……」

——ヤベえよ、俺短小だし……いや、夢だから……案外俺、巨根化してるかも。

半端な期待によって大して抵抗の素振りを見せない水本に、にんまりと笑う女たち。

彼女らにとって、水本は自分たちの運命を左右する「指導者」である。

それはゲーム的に言えば「プレイヤー」であるが、とにかく絶対的な存在といえる。

この世界の他の勢力は、構造としては同じように開拓から国を作っていく、まったくこの「うさぎ市」と同じようなものだが、指導者は水本のような人間とは違う。

この場にいる女たち同様、この世界の中の人間というか、AI的なものだ。

フォンティーンはこの世界の外と繋がっているとはいえ、やはり「作られた存在」である。

この世界の中で、水本こそ唯一の人間なのだ。

そんな特別な存在が、本気で嫌がれば彼女らも引き下がるだけのことだ。

もともと、彼はこの「うさぎ市」の指導者なのだから。

しかし本気で嫌がっていないなら、OKと見なして押してくる。

「それじゃ、見せてもらおうか！」

「水本さまのデカチ〇コ見たいか！」

「おおお！」

「あ、ちょっと……」

群がり、羽交い絞めにし、ズボンを下げる女たち——水本は気づいていないが、彼の服も市民たちと同じような質素な布の服である。

期待の目が股間に集まる。

頬を赤らめている女たち。

しゃがんで、股間の前にできるだけ大勢集まる。

それを見下ろしつつ、期待と緊張の混じった顔の水本。

——よし、巨根こい！　そしてハーレム展開だ！　夢万歳！

下着が下ろされ、丸出しにされる股間。

静まり返る女たち。

頬を赤らめ、にやけていた女たち。

「御開帳！　……あら？」

「んー……あちゃっ」

「これは……残念」

水本が期待した通り、ハーレム展開もありなぐらい盛り上がっていた女たち。

それが水本の股間を見た途端、一瞬で真顔になる。

ため息をつき、目をそらす。

「あーあ、なんだよこれ……」

「しっ！　そういうこと言わないの！」

「えー、それじゃ仕事に戻ろうか」

「そうですね」

「いや、いい休憩になった」

股間を丸出しにした水本を残し、さっさと引き上げる女たち。

「え、ちょ……あっ」

自分の股間を見て、飛び上がる水本。別に驚くことなどない。

普段通りの短小包莖でしかない。正直「二十五年ほど成長していないかな？」とってしまったモノがぶら下がっているだけである。ぶら下がる、というほどの事もないか。

「ああっ！　なんだこれ！」

思わず叫んでしまう。

と、立ち去っていく女たちが嘔き出す。

「ちょ、自分で驚いてるよ！」

「まあ、そりゃあんだけ超短小粗チンじゃねえ」

「ションベンするたびに驚くんじゃね？」

「ションベンって！」

「まさか指導者が、ダントツの極小チ○ポの持ち主とは」

「アレに「やらせろ」とか言われたご先祖かわいそー」

「キ○タマ蹴って当然だったわね」

「やれやれ、あんなチ○コでよく指導者面できるわよね」

「しっ！ 聞こえるよ！」

顔を真っ赤にして、ズボンを飛び上がるように引き上げる水本。

——ち、畜生、こいつら……聞こえてるってわかってるだろ？ わかってて……俺のチ○ポ笑ってやがるんだ、畜生……

「ぎゃはは、っていうかああいう短小野郎って、絶対「テクニックが重要」とか思ってそう」

「あは「短小有るある」だね！ まあ、短小ならそう信じるしかないよね」

「まあテクニックは大事だよな？」

「まあね。でも……」

「あは、デ○チン君でも同じようにテクニック磨いていけるってこと、考えないようにしてんだよねああいう短小連中」

「っていうか、**あんたそんなにテクニック自信あるんだ？** って聞きたくなるよねえ」

「仮に「デカさが意味ない、テクニックが大事」だとしても……それは別に「小さいとテクニックがある」ってことになるわけじゃないのに、テクが大きさより優越するって必死に主張する意味何なん？ って聞きたくなるよねえ」

「まあそりゃ粗チンコンプレックスってだけなんだろうけど」

「粗チンだから女に手を出せなきゃ下手なままじゃない、デ○チンでやりまくったらうまくなるじゃん、その結果は「粗チンでヘタとデ○チンで上手い」という地獄のような二者」

「っていうか、水本さまって上手いのかな？」

「そりゃさすがに上手いでしょ」

「だよね！ あんな短小チ○ポで童貞だったりしたら人生終了だもんね！」

「あの年だからね。三〇ぐらいっしょ？ まあ年齢もクソも、私らは全員二〇歳だけけど」

この世界の人間は全員二〇歳で子供も老人もいない。

年齢は概念として理解されているに過ぎない。合理的な世界ともいえるし、手抜きともいえるだろう。それは言ってみればプログラムを単純化するためにすべてに月を三〇日にするシステムを組むようなもの、だろうか。

都合一年三六〇日となるが、複雑なプログラムを組まずに堅牢なシステムを作ることを優先したわけだ。

ちなみにこの世界は**暦は適当である**。古代から現代まで文明が発達していく過程での諸勢力の興亡や社会の発展を観察するためのシミュレーションの世界なので「何月何日」という細かい話をしても意味がないのだった。

人々は適当に生きて働き、結婚したりしつつ、プレイヤーである水本が大幅に時間を進めれば世代交代する……そういうあいまいな構造の世界になっていた。

大事ななのは国というか、長い歴史の中でのそれぞれの民族そのものの行く末であって個人の細かい話はどうでもいいのだった。

この日、木を切る作業をしている男女の間で争いが起き、男のリーダーが金的を蹴られてフルチンにされ、短小を笑われた、などということは悠久の歴史の中では無いに等しい出来事である。

指導者がそれ以下の極小の一物の持ち主だと女たちに知られた、ということもやはり彼の物並みに小さいことといえるだろう。

体験版終わり

この後、部下の男たちと戦に出るも、敵は女戦士ばかりでキ〇タマ集中攻撃してきます。

勝ったり負けたり、捕虜がキ〇タマ潰しで女たちに惨殺されるなど過酷な展開もありますが、

死んだ兵士たちは「同じ人間としてまた出てくる」世界なので平気です、痛いだけ。

女たちは金貰えた楽しくて仕方なく、終始ハイテンションな軽い感じで進みます。

続きは製品版でお楽しみください